

日本における城の保存と活用

南華大学 ○黄 昱凱 中国科技大学 徐 淵靜
日大生産工 阿部 忠

1. まえがき

日本は、長い歴史のある国であり、その歴史遺産の中で、最も特色ある建築物の一つに「城郭」がある。城郭は、明治維新や第二次世界大戦の際に破壊されたが、日本の文化遺産であると同時に、観光的な役割も担うことから、戦後、広くその復元が行われた。また、日本は、自国の文化遺産を重視しており、現存天守の城郭は12ヶ所である。また、各地には復興天守の城郭が14ヶ所、復元天守の城郭は14ヶ所閣が存在している。こうした城郭は、地域の歴史文化を伝承しているだけでなく、観光発展にも大きく寄与している。とくに、都市においては、文化遺産の保存と都市開発の両立は困難であるのが現状である。また、歴史文化遺産の保存により土地の市場価値は低く、犠牲となっている。日本は1996年に文化財保護法を制定し、2005年に文化財保護法を改正し「文化財制度的導入」、「地方権限の委任」、「重要文化財の活用と促進規範」等の重要三方針(大河 直躬、2006)策定し、日本における各県の文化財保存と活用等の問題は重視され、歴史遺産の活用と再建も法律に基づいて発展している。

そこで本研究は、日本の城郭の保存を目的とし、文献の研究、専門分野の学者に対する意見徴収、ケーススタディ等を通じて、日本の歴史遺産の保存と活性化の経験を取り入れ、歴史遺産の保存と活性化等につて、相対的な重要基準と基準間の構造関係を構築するものとする。

2. 日本における城郭発展について

城郭とは、外敵を防ぐための防御施設である。最も古く築いた城郭は南北朝時代に遡られる。当時、単なる柵で作られ、臨時的な建物である。

城郭の建造時期から分析すると、南北時期では、山岳寺院は常に戦争の中心にさらされていた。その理由として、山城が多い。領主の居城では、外敵に攻められた際、領主は要塞堅固の山城へこもり防御拠点とした。この場合の山城は麓の根小屋に対して、詰めの城と呼ばれた。

室町時代では、山城の高さは約100~200メートルの麓で城を築いた。この時期は、城郭も大名の居地として防御された。

戦国時代(15世紀~16世紀)の初期は、各地の大名は、領土の統一を目的として、家臣団、商人等を集めることが主たる仕事であった。よって、本来の山城の優位性もまもなく、逆に平地に対する需要が増加してきた。しかし、戦略は絶えず起こっているために、基礎的な防御というデマンドが必要となり、結果としてより低い山麓の位置、或いは平野の丘陵に平山城を築くことが主流であった。平山城はほとんど標高20~100メートルぐらいの山麓に築城された。

戦国末期から江戸初期は、大規模築城という時期である。この時代には、各地に名を馳せた大名は、戦争に勝利し、領土を大幅に増加させた。城郭は軍事、政治等の支配中心の役割を増すことから益々重要視された。そのために、築城のポイントは、行政上の効率性が要求され、平城、水城という建築物が主流になった。

平城の主な特徴は、大規模な石垣と堀等の施設を備え、防御能力を強化させた。その結果、平城建築は、他の大名に城郭を築城する事で多くの人々を集結する力を現せる。豊臣秀吉が築いた大阪城は、最も代表的な平城建築物であると言える。その後、徳川家康の名古屋城および徳川幕府の江戸開幕の江戸城は、皆平城を代表する城郭である。

平山城と平城は、日本の近代城郭建築の特徴であり、城郭は約25,000城がある。これらの城郭のほとんどが戦国末期の桃山安土時代から江戸初期の徳川幕府時代(八巻 孝夫, 1995)に集中して建造されている。

城郭は、4段階に分けられて破壊され、この過程を図1に示す。

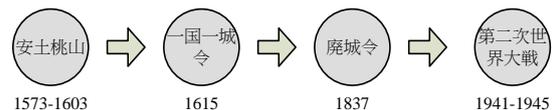


図1 日本における城郭廃城の四段階

The Reservation and Application of Castle in Japan

Yu-Kai HUANG, Yuan-Ching HSU, and Tadashi ABE

第1段階は、安土桃山時期であり、約3,000城が築城され、城郭建築の黄金時代である。この時代は大量な築城と同時に、大量な廃城を行われた。廃城した城郭の材料は、新たな城郭の建材として使用された。

第2段階は、大阪の役後（西元1615年）は、徳川幕府（江戸幕府）は「一国一城令」という法令を施行し、廃城或いは、統合させた城郭は約170城である。これは、城郭の発展史にとって、最初の計画的な大規模な破壊である。この中には、廃城を命じられた高岡城、松阪城および名古屋城などの名城も含まれていた。この「一国一城令」という法令の施行後、新城を築くか、古城を改築するかはすべて幕府からの許可状をもって進められた。この間、城郭建築は一時的に停滞した。よって、城郭数および外観は、当時のままに保存され、明治維新時代まで続いた。

第3段階は、明治維新の時代あり、徳川幕府に対する倒幕運動により、武士支配政治が終焉した。城郭は、徳川幕府の封建統治の象徴であった。明治政府は、明治6年（西元1873年）に城郭の存廃問題を検討しつつ、廃城令を下し、明治7年から8年間に、約65%の城郭が廃城した。その後、帝國主義時期になり、廃城令は、持続的に進行した。なお、廃城された城郭は、当時の軍事施設として使われ、廃城令は、日本における最も大規模な破壊事件である。

第4段階は、第二次世界大戦前、日本は、軍事主義の台頭で、戦争のため、多くの城郭は、アメリカの空襲で焼けた。例えば、岡山城、広島城、福山城、大垣城、和歌山城、水戸城および名古屋城等が挙げられるが、その中でも、広島城は、原子爆で全壊した。

第二次世界大戦後、城郭は、各地風土及び歴史の遺産として、観光資源の機能があり、再建に焦点を当てた。昭和20年に終戦後、天守閣の再建計画を始め、破壊された天守閣、櫓、城門等の建物を再建した。その後、各地における城郭も次々と再建され、復元された。再建は元の姿に基づいて外観復元した城郭には、復原天守（広島城など）である。復元において、外観が不明の場合は、再建後の城郭は元の城郭とは異なることから復興天守とされ、最初の復興天守は、岐阜県にある岐阜城である。現在日本における城郭は、現存天守と、復原天守および復興天守の3類型であり、大部分の城郭は、その地方において、重要な歴史博物館および観光拠点として機能している。

3. 姫路城における保存と修復

姫路城は、兵庫県の姫路市にある。日本における規模最大の平山城であり、遠くから姫路城を眺めると、天空の白鷺のように見えることから白鷺城とも呼ばれている。外観の美しさは、日本ナンバーワンと言われている。日本における姫路城は、豪壮的で綺麗な天守群として知られ、唯一世界文化遺産の城郭である。歴史的に姫路城は、室町時代、播磨の豪族赤松氏が姫山に作られた簡単な防衛工事であり、その後、安土桃山時代の天正五年（西暦1577年）に、織田信長の命令により征伐毛利家征伐の目的で後の豊臣秀吉の家臣、小寺氏一族居城として、姫路城が現在の位置に作られた前線基地としては、比較的に大規模な建造物であった。本来、姫路城は、天守閣的な規模も3階建であったが、その後、徳川幕府の時代に、徳川家康の女婿である池田輝政氏により大規模に再建され、今日の地上5層6階、地下1階となった。現在の姫路城を歴史的にみると、築城者は豊臣秀吉であるとも言われている。一方、池田輝政であると思われる場合もある。

姫路城は、日本における現存12城の内、天守閣の規模は最大であり、保存も完全に行われた国宝である。実は、「国宝」という制定は、日本政府が施行した文化財保護法（1950年）に基づいたものである。その以前は、「国宝」や「重要な文化財」という区別がなく、広義的に「国宝」と見なされていた。文化財保護法を実施した後、国宝の認定は厳密になった。多くの元国宝は、有形文化財とランクダウン（等級落ち）で、重要文化財になる。例えば、丸岡城は安土桃山時代に建造されたと推定される天守は、国の重要文化財に指定されている。しかし、多くの人々は、1950年前に認定された国宝は「古国宝」と扱われ、1951年後に再認定され場合は「新国宝」として扱われている。例えば、寺、神社や城郭を見学する際に「国宝〇〇寺」或いは「国宝〇〇城」と記載されているが、正確に分析すると、国宝で指定されたものは、建物を対象としたものではなく、建築された個別物件を対象としている。国宝としている姫路城は、指定された姫路城内の四座天守および四渡櫓である。その他の建物ある櫓、門、塀等は、重要文化財と認定されている。

一方、文化財の保存には、全面的な保存と部分的な保存に分類されている。全面的な保存は、現地保存と移築保存であり、部分的な保存とは、

外皮保存、元素保存、外観保存の3つに分類される。姫路城は日本で最も代表的な現地保存類型という歴史遺産である。また、東関東大震災後、政府は文化財の保存、修復及び復原などを重視し(木下 正史, 2012)、これによって姫路城は、平成5年に世界文化遺産として登録され、文化(建造物群)類別である。ここで、姫路城が登録世界文化遺産として登録された内容を表1、姫路城の国宝一覧を表2に示す(www.city.himeji.lg.jp, 2015)。姫路城は世界文化遺産に指定された理由を以下に示す。

(1) 美的完成度が日本の木造建築の最高位にあり、世界的にも他に類のない優れたものである。

(2) 17世紀初頭の城郭建築の最盛期に、天守群を中心に、櫓、門、土塀等の建造物や石垣、堀などの土木建築物が良好に保存され、防御に工夫した日本独自の城郭の構造を最もよく示した城である。

姫路城の保護保全を目的とし、平成21年から大天守の保存や修理に関し、内容を以下に示す。

(1) 世界遺産であり、国宝である姫路城大天守の外壁および屋根瓦の補修と耐震性能評価に基づく構造補強などの保存修理工事を実施する。

(2) 世界遺産の大規模な改修工事ということから、現場は原則公開とし、文化財の保護、保存修理に対する啓発やPRを行うとともに、世界遺産姫路城の価値を広く公開する。

姫路城の平成大修理は、平成21年10月着工から最終の足場撤去までを実質5年間(年度では6年度)で実施し、平成26年度に素屋根や足場を撤去した。工事期間中は、大天守を完全に覆う形で素屋根をかけ、作業を行いう。工事用の資材や機材などは、大天守東の美術館側から搬入した。また、腹切丸東側から資材搬入用の足場を設置して、備前丸まで直接運び入れる。

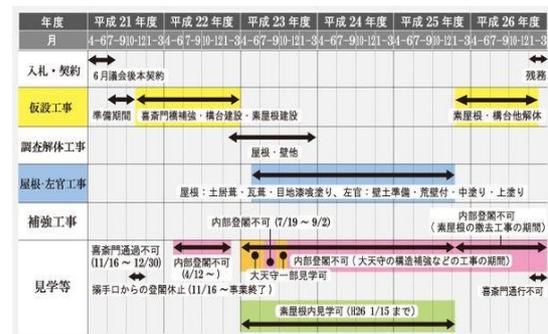
表1 登録内容

所在地	兵庫県姫路市
遺産区域	構成資産107ha (コアゾーン) 緩衝地帯143ha (バッファゾーン)
顕著な普遍的価値の評価基準	人間の創造的才能を示す傑作であること。 歴史上の重要な段階を語る建築物、その集合体、科学物質の集合体あるいは景観を代表する顕著な見本であること

表2 姫路城国宝一覧(建造物)

番号	名称	員数
1	姫路城大天守	1棟
2	姫路城西小天守	1棟
3	姫路城乾小天守	1棟
4	姫路城東小天守	1棟
5	姫路城イ・ロ・ハ・ニの渡櫓 附台所1棟	4棟

表3 スケジュール表及び内容



姫路城の平成大修理に関する工程表内容を表3(神戸新聞総合出版センター、2015)に示し、具体的な工事内容を図2、3、4に示す。ここで、修理内容を下記に示す。

(1) 壁面修理: 下層部(1~3層) 表面の漆喰の修復; 上層部(4・5層) 下地から修理、(2) 軒先、破風、懸魚等は上塗り修理または下地から修理、(2) 屋根修理、(3) 全面葺き替え(瓦は再利用)、(4) 瓦留め(釘または銅線による補強)、(5) 目地漆喰の全面修復、(6) 構造補強: 耐震性能の向上のため、建物内部の構造補強(床組の補強ほか)、(7) 仮設工事、(8) 素屋根方式とする、(9) 内部に工事



図2 姫路城における平成修理外観の工事



図3 姫路城における平成修理見学案内

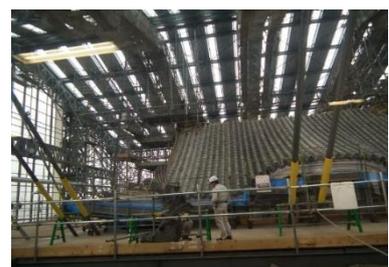


図4 姫路城における修復内部工事の状況

作業用スペースと公開見学用スペースを確保見学者用のエレベーターを設置

4. 姫路城の活用

歴史的遺産の活用方法には、社宅施設、体験型施設、観光施設および商業施設等の種類があり、活用の形態では、持続型活用、復活型活用および転用型活用の三種類型である（大河 直躬、2006）。保存、再生と活用等においては、促進活動の主体としては、行政、住民と企業であるが、近年専門家およびNPO組織の意見も広く採用されている。姫路城は、平成の大修理というチャンスで、姫路城および周辺施設の活用形態などを検討し、全体を考慮し計画され、姫路城は、活用戦略の策定プロセスには、政府、NPO、専門家、市民、関係事業および学生など6つの意見を取り入れ、姫路城の活化戦略方針を制定したものである。以下は、敏感度モデルから異なる側面に対する影響の状況について分析する。

ここでは、まず、5人の文化財活用保存方面の専門家から意見を聞き取り、フォーカス・グループ調査を行い、敏感度モデル分析のマトリクスとして表4に示す。表4には、政府(X1)、NPO(X2)、専門家(X3)、市民(X4)、関係事業(X5)および学生(X6)として意見調整をまとめた。また、表4の数字0は影響がない。表5は影響が大きいことを示す。また、X1→X4の例を挙げると、その数字は3で示している政府(X1)の意見対市民(X4)に中程度の影響である。敏感度モデル分析のマトリクス内、ASは、主動点数(Active Sum; AS)と呼ばれ、ある変数は他の変数に対する影響程度の総和である。PSは、被動点数(Passive Sum; PS)と呼ばれ、ある変数は他の変数に影響される程度である。変数Qは、AS/PSの比較値、Qは主動性指標と呼ばれ、その値は大きければ、変数は他の変数に影響しやすいと共に他の変数に影響されにくいということを意味する。次に、ASとPSによる敏感度モデルの分析結果を図5で示す。

その中では、Qの値の大きさは、各変数が図4に示す面積によるものである。

敏感度モデル分析の結果より、専門家(X3)は他の組織に対する影響は最主要であり、専門家の意見は、他の意見よりも、グループ内に影響しやすいと共に、専門家は他の意見に影響しにくいということである。一方、市民(X4)の意見は、政府(X1)とNPO(X2)グループに重視されている。

表4 敏感度モデル分析のマトリクス表

	X1	X2	X3	X4	X5	X6	AS
X1	0	3	0	3	2	3	11
X2	0	0	2	4	3	3	12
X3	3	2	0	4	3	4	16
X4	3	3	0	0	0	1	7
X5	2	2	1	2	0	0	7
X6	1	2	0	2	1	0	6
PS	9	12	3	15	9	11	
Q	1.22	1	5.33	0.47	0.78	0.55	

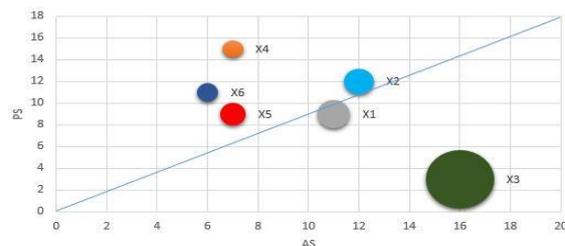


図5 敏感度モデル分析の結果

5 まとめ

近年、持続性発展(Sustainability)等の環境共生という概念は重視されつつある。文化財の保護（保存と活用）は、地域商業の活性化に大いに役に立っている。歴史的遺産の保存は、世界各国が努力している目標の1つであり、とくに都市においては、保存と開発が競合する際に、歴史資産保存の市場価値は、低く想定されるために後回しにされる場合もある。しかしながら、歴史的な建築物が市場競争力を持たないからといって、存在価値がないと決め付けることはできない。以上より、日本の歴史的な建築物の保存法は、台湾における歴史的建造物の保存においても大きく寄与するものである。

「参考文献」

- 1) http://www.city.himeji.lg.jp/s70/2845684/_11311/_17981.html
- 2) 大河 直躬、歴史的遺産の保存・活用とまちづくり、学芸出版社（2006）pp.73-101.
- 3) 八巻 孝夫、近世城郭の保存と活用、『中世城郭研究』第9号（1995）pp. 76-101.
- 4) 木下 正史、被災文化財等救援委員会への参加と取り組み、平成23年度活動報告書（2012）、p. 108-111.
- 5) 神戸新聞総合出版センター、姫路城 平成の大修理、神戸新聞出版センター（2015）、p.19.